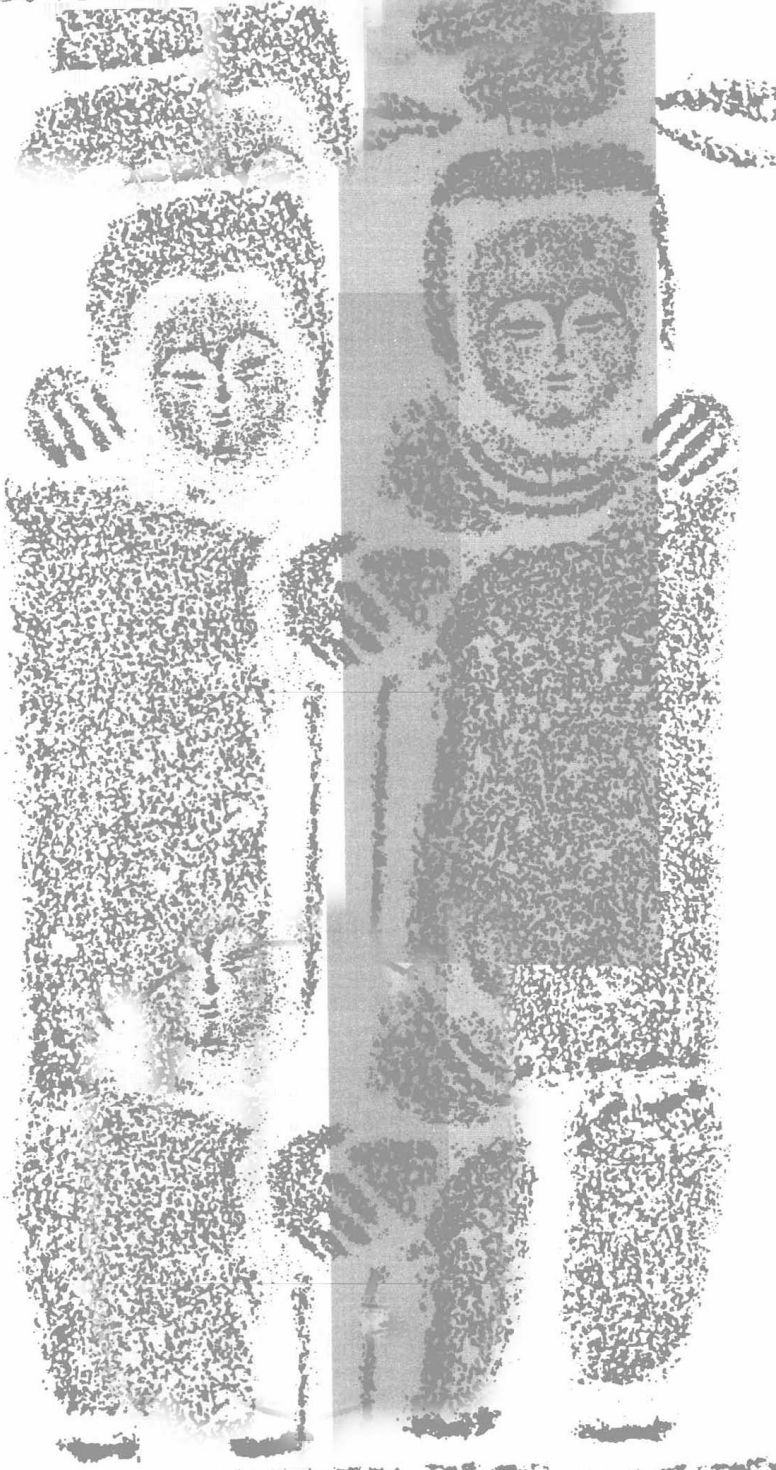
野のはずれの神様

立松和[redacted]

野のはずれの神様

立松和平



河出書房新社

野のはずれの神様
© 1982
Printed in Japan

一九八二年六月二〇日　初版印刷
一九八二年六月二五日　初版発行

著　者　立松和平

発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話　営業　〇三―四〇四―一二〇一
編集　〇三―四〇四―八六一一
振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印　刷　中央精版印刷株式会社
製　本　大口製本印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

幼年記 5
大洗 43
薄明の鳥 103
帰郷祭 139
をちち草紙 175
野のはずれの神様 193
後記 227

装幀＝荒川じんぺい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

野のはずれの神様

幼年記

暗い心象風景がある。二歳の私は闇の中で頭を下に立っているのだ。生温い汚水の中だった。ドブに落ち、したたか汚水を飲んだあげく発熱したと、よく母に聞かされた。もちろん幼年の私が、頭からドブに落ちて助けを待っている自分の姿をもうひとつの眼で見ていたはずもなく、父や母の話によって後年かたちづくられていった心象風景に違いない。

汚水に顔を突っこみ、もう少しで窒息死しそうだったらしい。そばで遊んでいた私の姿がかき消え、不思議に思った父が作業場から何気なく往来にでていき、ドブにうつぶしている私を発見したのだ。父はあわてて私を助けあげた。父は地面に片膝つき、立てたほうのももに私の腹をのせ、背中から押したのだ。びっくりするほどの泥水を吐いたらしい。詰まった鼻を口で吸って通るようにしてくれたらしい。夏で異臭が激しく、自分もどろどろになったと、父が話していた。私にはその時の父について記憶の一片も残っていないのだった。

家は借家で風呂がなく、近所の銭湯を利用していた。夏で煉炭コンロにヤカンがかかっていたわけではないから、すぐさま私は裸にされ、母に水で絞ったタオルで拭かれたのだと思う。私は泣き声をあげる元気もなく、涙のたまった充血した眼を見開き、蒲団に横たわっている。痩高い父と母の声を聞きつけ、近所の人たちが集まってくる。うがいをするようにと母が私の口にコップを傾け、

顔の前に洗面器を置くのだが、私は水を飲まないでうまく吐くことができない。口の内側は膜ができたようにいがらっぽく、喉の奥から腐臭のするゲップがでてくる。間もなく私は汚水に溶けていくような眠りにゆるゆるとはいっていくのである。

父は宇都宮の駅の近くに家を借り、モーターの再生屋をやっていた。空襲で工場が燃えたり、加熱して焼き切れたりしたモーターを東京から買ってきて、ステイターやローターのコイルを巻き直し、再生するのだ。ステイターはモーターの外側の回転しない部分で、コイルは巻くのではなく溝に押込んでいくわけだ。溝のかたちにあった木型をつくり、それに銅線を巻いて輪にすれば、内側から溝にすっぽりと納まる。父はその木型を幾種類も考案し、コイルを押込む際の竹ベラを工夫した。町工場が再開したためや、農家の揚水や脱穀のために、モーターの買手はいくらでもあった。予約がたまって仕事に追いまくられたそうである。ていねいに巻かれた赤銅色のコイルは花が咲いたように美しかった。

事務所用につくられた家で、土足であがるようになっている板床の作業場の奥に、六畳一間があった。畳は黄ばんで毛羽立ち、擦切れて白い糸が見えていた。六畳間の隅に木箱にブリキ板を貼った流し台があり、それがつまり台所だった。煮炊きは作業場に七輪をだし炭をおこしてやった。冬は煉炭コンロで飯を炊き魚を焼いた。

父は日がな一日作業場にいた。りんご箱に座蒲団を敷いて椅子がわりにし、古い銅線を糸巻器で伸ばしては、ステイターやローターにていねいに力をこめて巻いた。銅線を絶縁しているゴムは、上に藁を積んで火をつけると、簡単に燃えた。丹念にグリースを塗り組立てが完了しても、父は外まわりに紙ヤスリをかけたりして、なかなか電源につなごうとはしなかった。ギューンと回転をは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

じめる鋭い音が、私は好きだった。やがてグリースの焦げるにおいが漂ってきた。黒エナメル塗装し、製造メーカーや製品番号や製造月日が打ってある偽造のアルミニウム板を貼りつけると、完成だ。

痩せた馬力のない父は、作業場での再生の仕事を専門にやっていた。東京から焼けモーターを運んでくるのは、闇屋のマッちゃんと呼ばれた、色浅黒くガッチリした体軀の松田という男だった。両切りの煙草を指が焦げそうなまでに吸う時、いかにもうまそうに細めた眼が、印象的だった。買出し列車で気狂いみたいに混雑した東北本線を、屋根に這いあがり窓からぶらさがり、毎日往復するのだ。一台十キロはある焼けモーターを一度に四台と、他に進駐軍放出の罐詰や衣料を担げるだけ持ってきた。腹にいちもつありそうな松田という男が、私は子供心にも嫌いだった。笑顔で親しそうに話していた両親が、松田がいなくなるや露骨に悪口をいいだすことも、原因したのかもわからない。後年耳にしたところによると、松田は一台三四百円で買ってきた焼けモーターを、父には千円で売りつけていたらしい。外観はよくとも開けてみると、中に錆やら砂やらが詰まって再生不可能のものもあったらしい。父にしても、いくら手間がかかるとはいえ、再生したモーターを七八千円で売っていたのだ。しかも、電力会社の規定より無理に馬力をあげるよう細工した。勤め人の月給が六七千円の頃だというから、三日に一台仕上がるとすれば、たいした稼ぎではないか。それでも、暮らしむきが豊かだったという記憶は、私にはない。

松田は頼まれれば何でも運搬していき、どんなものでも東京で探してきた。父が依頼する焼けモーターは食糧統制法にはひっかからないが、危険な品物を持っている時には、松田は走っている列車からでも跳び降り、駅を一つや二つ歩くのは苦にもしなかった。依頼主の荷物は死にもの狂いで

守り、そのことに関しては頭が素早く回転し身体も俊敏に動き、絶大の信用があった。有能な担ぎ屋だったのだろう。豚肉やアメリカ煙草やコンビーフや化粧品など、松田は時々思わぬ貴重品を持っていて、母も口車に乗せられ高く買ったらしい。

松田は身体ひとつの担ぎ屋がいつまでもつづくはずがないことを見越し、稼ぎを蓄えておいた。彼がはじめたのは養豚業だった。いや、正確には屠殺業である。養豚農家から豚を買い集め、山の中の家で飼っておき、時機を見て殺しては肉やモツを売って歩いた。私の家の食卓に不意に不釣合いな豚肉がのることがあったのも、そのためだ。豚肉でスキヤキをするのが最高の御馳走だった。母が息をかけて冷してから私の口にいれてくれた肉の味を、今でも思い出すことができる。炭火で焼き箸で突つきながら食べるモツのホルモンは、噛んでも噛んでもゴムのように切れず、私には苦手だった。モツに糞のにおいが微かだが残っているのもいやだった。父が一番上機嫌で、汗みずくになって焼酎を飲んだ。父の唇は脂でギトギト輝いていた。

もちろん松田が屠殺業の看板をあげたわけではない。屠殺の許可があるはずもなく、もぐりの商売だ。徹頭徹尾闇の中に生きているような男だった。世の中全体が闇の中にあったのかもわからない。山の中の家といっても山奥ではなく、住宅地と隣接した雑木林である。畑地を蚕食するように住宅が疎に建っており、燃料や堆肥をとるためのくぬぎ林がまだかなり残されていた。地主に了解をとったのか無断でか、松田は板きれや古材や焼けトタンで自分の住む家と豚小屋を建てた。踏分け道が、幾度もオートバイが通るうち広くなった。くぬぎ林の中央部は心持ち窪地になっており、泉が湧いていた。松田は豚小屋から豚を引きだし、ハンマーで頭を打って殺し、木に吊して解体した。皮を剝かれた白い大きな豚が暗い森に揺れているのだ。生き生きとした銀蠅がまるで靄のよう

に豚にまつわりついている。腹に縦に包丁をいれる。どぼどぼとあふれだした内臓を何杯ものバケツに受ける。

背骨を真っぷたつに断割った豚のバラ肉をオートバイの荷台に積んできた松田の姿は、何度も見たことがある。肉を横にさし渡したオートバイに背筋を伸ばしてまたがった松田は、何となく奇妙だった。肉を包んだ新聞紙は血にまみれ、凄惨な感じだった。松田は市内の肉屋にこっそりと安く卸した。もっと細かく切って家庭にも売って歩いた。朝潰した肉をその日のうちに処分するのだから、品もよかったはずだ。松田はみんなに役立っていたことになる。

これも後に知ったことであるが、松田は女と暮らしていた。母がいうには、どこかで拾ってきた女ということだ。父も母もこの女に会ったことはないとみえ、当然私も記憶にはない。女は山の家からほとんどでず、松田の話しぶりによって、みんなは女の存在を知っていた程度にすぎないのだ。同じ街の人間なら氏素姓がわかるはずで、噂にもならないということは、本当に拾ってきたに違いない。松田の仕事は豚の密殺だけになり、肉もオートバイに積んで売って歩くことはせず、きまった肉屋や料理屋にしか卸さなくなった。仕事が軌道に乗ったということなのだろう。父の焼けモーターはトラックで運んでくる男から買うようになった。

松田の噂が一挙にひろまった。松田は死んだのだ。商売を拡大しようとオートバイからオート三輪車に買い替えたことが災いした。運んできた豚を山の家に降ろそうとした時、ぐらりとオート三輪車が倒れ、松田は下敷きになって死んだ。葬式をやったのかどうかはわからない。松田の事故からずいぶんと日がたって噂がひろまった。街の人間が知った時には、女の行方はわからなくなっていた。警察には調べられたろうが、密殺は松田一人でやっていたと解釈されたようだ。警察もつま

らないことに関りあうのが面倒だったのかもわからない。

この世から去ったと同時に、松田の噂はあちこちから湧いてきた。松田は東北地方で小作争議を指導し、警察に追われて名を隠し、流れ流れて満州まで逃げたというのだ。意図的だったのかどうか、徴兵も回避してしまった。松田が兵隊にいかなかったと自慢しているのを聞いたことがあると、誰かがいった。大連からの引揚げ船にまぎれて帰り、上野の地下道で暮らすうち、担ぎ屋の仕事をするようになった。荷物を運ぶのを頼んだのがたまたま宇都宮の人で、松田自身はもともとこの街とは縁もゆかりもないのだ。担ぎ屋をやっている時に住んでいた場所を誰も知らなかった。必要になるとふらりといずこからともなく現れた。

あの頃は、どこからか流れてきて人知れず消えていった人間が、あまたあった。うまく成功した人もいることはいたが、たいていは食うことで精一杯だったと、父や母の話しぶりから思うのだ。一カ月もしないうち、松田の噂はあとかたもなくなり、まして誰も見ていない松田の女のことなど、記憶に欠片(かけら)にも残らない。

三十年もたてば、幼時の記憶は、すべて心象風景であるかもわからない。当時のままの記憶などあり得るはずもなく、後からの雑多な情報にまぎれ、歪んでしまっていると思う。私がドブに落ちたのは本当だとしても、暗闇に真っ逆様に立っているはずがない。まるで胎児ではないか。二歳の心象風景というより、それ以前の、母親の胎内にいた頃の記憶だといったら、いいすぎだろうか。

生温かくて気持のいい場所だった。雨も風も陽光もなく、もちろん息が詰まって苦しいということもなく、もう永いことそうしているようだった。それを、両の足首を摑まれ、まるで大根でも引き抜くようにして、父に救出されたのだ。実際はドブの深さは十センチもなく、ただ水面に顔をつ

けていただけだろう。私は狼狽する父と母をぼんやり見ながら眠った。

目覚めると、黄ばんだ油紙のような畳に、埃っぽい白い光が射していた。朝食をすませた後なのか、母が流し台に立って洗いものをしていた。柔らかそうな母のふくらはぎの透明な皮膚の内側に、壊れやすそうな細い静脈があるのが見えた。ブリキの流し台から水が跳ね、束の間銀色に輝き、すぐ畳に吸われた。作業場からはモーターの回転する滑らかな音が聞こえていた。私はもう一度静かに目蓋を重ねたのだった。

幼い目配りの中での記憶は、すべて霧に包まれたように輪郭が曖昧である。その霧の中から、一人の男が歩いてくる。母の弟、私にしてみれば叔父の、花崎春樹だ。叔父は真綿のはいった枯草色の飛行服を着け、手入れのよい黒い編上靴をはいている。当然後年の猥雑物で歪められた姿に違いない。きっと戦争映画の主人公と重なってしまったのだ。叔父は特別攻撃隊の生き残りの戦闘機乗りだった。父も母も若いはずだが、ことに叔父は凛々しい青年である。春樹お兄ちゃんと、私は叔父を呼んでいた。

叔父は何するともなくぶらぶらしていることが多かった。父が世話をして店員になったり、オート三輪車の運転手をやったりしたものの、何事にも執着心が薄く、すぐ辞めてしまった。少し長くつづいていても、必ず店の主人や客と喧嘩をしてしまい、自らの立場を苦しくした。一日中りんご箱にすわってじっとコイル巻きをしている父は、義弟とは気があわなかったと思う。叔父のことが原因で、父と母とがいいあいをしているのを、私はよく目撃した。母は弟を何とかまっとうな仕事

に着かせようとしていたらしい。口争いはしたにせよ、実際父は義弟の面倒をよくみていた。叔父は一ヵ月ぐらい遊んでは母に意見され、父の見つけた仕事につくことをくりかえした。親身になってくれる姉夫婦がいたからこそ、一歩踏みとどまったのかもわからない。

遊んでいる時期の叔父は、見るほうが気恥ずかしくなるような格好をしていることがあった。髪はべったりとポマードで固め、白いスーツに白い靴、ピンクのワイシャツを着ていた。ことにネクタイは印象に残った。遠山金四郎の背中の彫り物のような桜吹雪の刺繍がしてあった。今でも鮮明に思い出すことができる。闇を表わす青紫色の絹の地に散る夜桜の絵柄のネクタイは、後にも先にもその一本しか見たことはない。それとも、幼い記憶の中でだけ、色鮮かなのだろうか。いかにも遊び人といった風情である。奇矯なほど派手な服装が、真面目な父の癇に触らないはずがない。おまけに叔父はよく化粧の濃い女を自慢そうに連れ歩いていた。

叔父はアメリカ煙草をくゆらせ、唇からジャズの一小節を洩らした。靴先で床を打ってリズムをとり、首を振りながら指を鳴らした。額にかかってくる前髪をうるさそうに払う指の動きも気障だ。叔父はダンスホールに入揚げていたのだった。

当然のことながら、幼い私にダンスホールなど理解できるはずがない。いってもいいような年齢になったら、跡かたもなくなっていた。それでも話だけは知っている。まずチケットを入口で買う。切りとりのミシン目がはいっている十枚つづりの切符だ。壁にならんでいる好きな女を指名し、一曲踊るごとにチケットを一枚ずつ渡していく。女が気にいれば、一曲で二枚でも三枚でもチケットをやるのだ。週に一度の給料日(ペイ・デー)ともなると、進駐軍から兵隊たちがどっと押し寄せ、レコードではなく本物のバンドがはいるのだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com